

Muslim Ambassadors in Madrid at the Second Half of the 18th Century

(18世紀後半マドリードにおけるムスリム使節たち)

2005年7月21日、ムハンマド5世大学(ラバト, モロッコ)教授で、本年8月末までアジア・アフリカ言語文化研究所の客員教授であった Abderrahim Benhadda (アブドゥラヒム・ベンハッダ)氏による研究報告「Muslim Ambassadors in Madrid at the Second Half of the 18th Century (18世紀後半マドリードにおけるムスリム使節たち)」がおこなわれた。ここでは、すでに帰国された報告者に代わって、当報告の要旨を日本語で紹介する。

当報告は、18世紀にスペインに赴いた二人のムスリム使節の旅行記を通して、ムスリムたちの多様なヨーロッパ認識のあり方を示そうとしたものであった。一人はオスマン朝からの1787年に派遣されたワースィフ・エフェンディ、もう一人はモロッコのアラウィー朝から1779年に派遣されたイブン・ウスマーンである。

ワースィフ・エフェンディは、イラク生まれのオスマン朝官人で、宮廷歴史家としても修史官という高い地位にまでついた人物である。また、スペイン派遣以前にもしばしば外交使節として派遣された経歴を持っていた。17世紀のオスマン朝とスペインとの関係は概して希薄なものであったが、18世紀になるとスペインは北アフリカからの海賊行為を取り締まるためオスマン朝との交渉を求め、16世紀以来徐々に両者のあいだに直接の交渉がもたれることになった。ワースィフ・エフェンディがマドリードに派遣されたのは、こうした交渉の過程で1781年に調印された協定の批准のためである。

一方、モロッコのイブン・ウスマーンは、このときのマドリード派遣がはじめての外交使節としての経験で、このときの派遣を首尾よく終えたことで彼は以後もたびたび外交使節として各地に派遣されることになる。スペイン派遣はいわば彼にとって外交上のキャリアを積む上で最初のステップであった。モロッコ対スペイン関係は、オスマン朝のそれに比べるとはるかに密接なものである。スペインはモロッコの複数の沿岸諸都市を占領していたが、それゆえに両者の間には16世紀以来、不断の交渉がみられた。イブン・ウスマーンが派遣されたのも、1767年に結ばれた休戦協定をめぐって双方の主張に齟齬がみられたためであり、17世紀以来たびたび使節を派遣して展開された一連の外交交渉の中に位置づけることができる。

当報告では、このような二人が残した旅行記からいくつかのトピックを拾い上げて、両者の相違点や共通点が検討された。例えば、スペイン入国に先立って一定期間の隔離が要求される検疫に対しては、この慣行になじんでいなかったオスマン朝のワースィフ・エフェンディが反発したのに対して、モロッコのイブン・ウスマーンは比較的素直にこれを受け入れている。また、外交上の儀礼・慣行についても、ワースィフ・エフェンディが閣僚クラス的人物による応接を拒否していきなり国王の接見を要求したり、スペイン国王とオスマン朝君主とを同格の称号で呼ぶことを拒否するなど、大国オスマン朝を意識した行動

に出るのに対して、イブン・ウスマーンは国王との謁見までに時日を要したことを逆にスペイン側のモロッコ使節に対する敬意の現れであると解釈していた。さらに、外交使節にはつきものの贈物についても、ワースィフ・エフェンディは国王以外にその親族や近臣にまで贈ることを拒否して、一時、両国関係をこじれかけさせたりもしており、ここでもイブン・ウスマーンには見られない態度をとっている。

このように、両使節にはそれぞれ対照的な点がまま見られるが、一方で共通点もある。例えば、両者いずれにとってもスペイン国王は異教徒の王であり、常に「暴君（ターギヤ）」として言及されるべき存在であった。また、エスコリアル修道院所蔵の大量のアラビア語書籍のコレクションについては、異教徒の地にコーランやイスラーム諸学の書がおさめられていることに両者とも無念の想いを述べている。もう一つ、両者が共通に関心を抱くのは軍事である。これについては、当時、オスマン朝もモロッコもいずれも軍事改革を必要としていたことを指摘することができる。

総じて、モロッコのイブン・ウスマーンはスペインに関して、自分たちと隣接する異なる信仰を持つ人々の文化や社会について、きわめて詳細に観察しそれを客観的に記録しようとしているといえるが、それに対してワースィフ・エフェンディには、こうした観察者としての側面はきわめて少ないといえる。

ただし、このような相違は二人の使節個人の文化的・政治的な立場の違いに起因するものというよりは、むしろモロッコとオスマン朝それぞれが置かれていた状況によるものといえるであろう。モロッコは、地理的にヨーロッパに近く、沿岸にはスペインによって支配されている港市もあった。こうしたことから、モロッコはヨーロッパの軍事的・経済的圧力をより強く意識しており、それが相手をよりよく知ろうという姿勢につながったのであろう。

一方、オスマン朝は18世紀においても依然として大帝国であり、支配下にあるバルカンをのぞけばヨーロッパに対する関心はきわめてうすかった。特にスペインのように遠く離れた国には利害もあまりなく、気に留める必要はあまりなかった。こうしたオスマン朝の態度が変わり始めるのは、18世紀末以降、ヨーロッパとの力関係に何らかの変化が生じつつあると彼らを感じ取るようになってからのことである。

従来、ムスリムたちのヨーロッパ認識は「イスラームの家」と「戦争の家」という二項対立的な世界観に規定されてきたと見なされてきたが、当報告はそれに疑問を投げかけるものである。当報告の主題である外交使節に関しては、それぞれの出身国と派遣先国との外交関係やヨーロッパに関する情報の蓄積量など、さまざまな要因が彼らの対ヨーロッパ認識を左右していたといえる。

（文責 佐藤健太郎）